

モネ、セザンヌ、ピカソ
巨匠たちと出会う 現代アート

会期:2019年8月10日(土)- 12月1日(日) 会期中無休
会場:ポーラ美術館(住所:神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285)

T E L:0460-84-2111

開館時間:9:00-17:00(最終入館は16:30)

主催:公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館

入館料:大人 1,800円(1,500円)、シニア(65歳以上) 1,600円(1,500円)、大学・高校生 1,300円(1,100円)

本展覧会開催に合わせ、8月10日(土)より中学生以下の入館料が無料になります!

※ ()内は15名以上の団体料金 ※ いずれも消費税込

イベント:担当学芸員によるギャラリートーク(各回14:00~14:40)

8月17日(土)、9月14日(土)、10月12日(土)、11月9日(土)

HIRAKU PROJECT 半澤友美展(8月10日~12月1日)

ポーラ美術館は開館以来、印象派を中心とした近代絵画のコレクションをおもに公開してまいりましたが、15周年を迎えた2017年に、現代美術を展示するスペース「アトリウム ギャラリー」をオープンしました。このスペースでは、公益財団法人ポーラ美術振興財団が1996年から助成してきた若手芸術家、約300名を対象に作品発表の場を提供するプロジェクト「HIRAKU Project」を行っております。

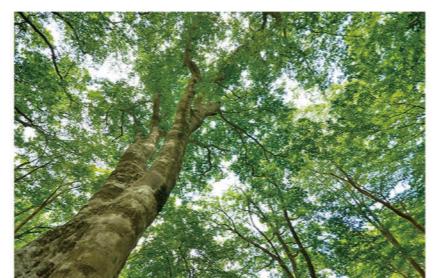
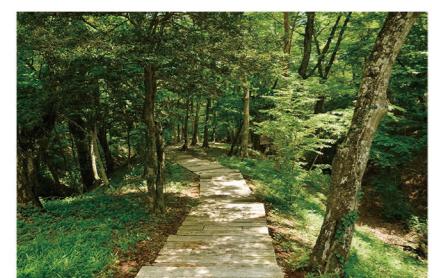
「シンコペーション:世紀の巨匠たちと現代アート」展の会期中は、第9回目の展示となる半澤友美展を開催します。



《The Histories of the Self》の連作より

森の遊歩道と野外彫刻

2013年に富士箱根伊豆国立公園の自然をいかした「森の遊歩道」がオープンしました。ブナやヒメシャラが群生するこの遊歩道は全長670m、散策所要時間は約20分です。アイ・ウェイウェイや青木野枝らの彫刻作品を展示しています。



報道に関するお問合せ

ポーラ美術館広報事務局 プラップジャパン 担当:屋木、名取

TEL: 03-4570-3172 / FAX: 03-4580-9128 / MAIL: polamuseum.pr@prap.co.jp

住所: 〒107-6033 東京都港区赤坂1-12-32 アーク森ビル33F 私書箱562号

ポーラ美術館 広報担当:中西、井本

TEL: 0460-84-2111 / FAX: 0460-84-3108

住所: 〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285

Press Release

【報道関係者各位】

2019年5月

syncopation



2019.8.10 Sat. — 12.1 Sun. 会期中無休

シンコペーション:世紀の巨匠たちと現代アート

表紙:クロード・モネ《睡蓮》1907年 ポーラ美術館蔵 |セレスト・ブルシェームジュノ《クリナメン v.4》2017年
Installation view: 14th Lyon Biennale, 2017 © Céleste Boursier-Mougenot Photo: Blaise Adilon

ポーラ美術館
POLA MUSEUM OF ART

箱根 仙石原

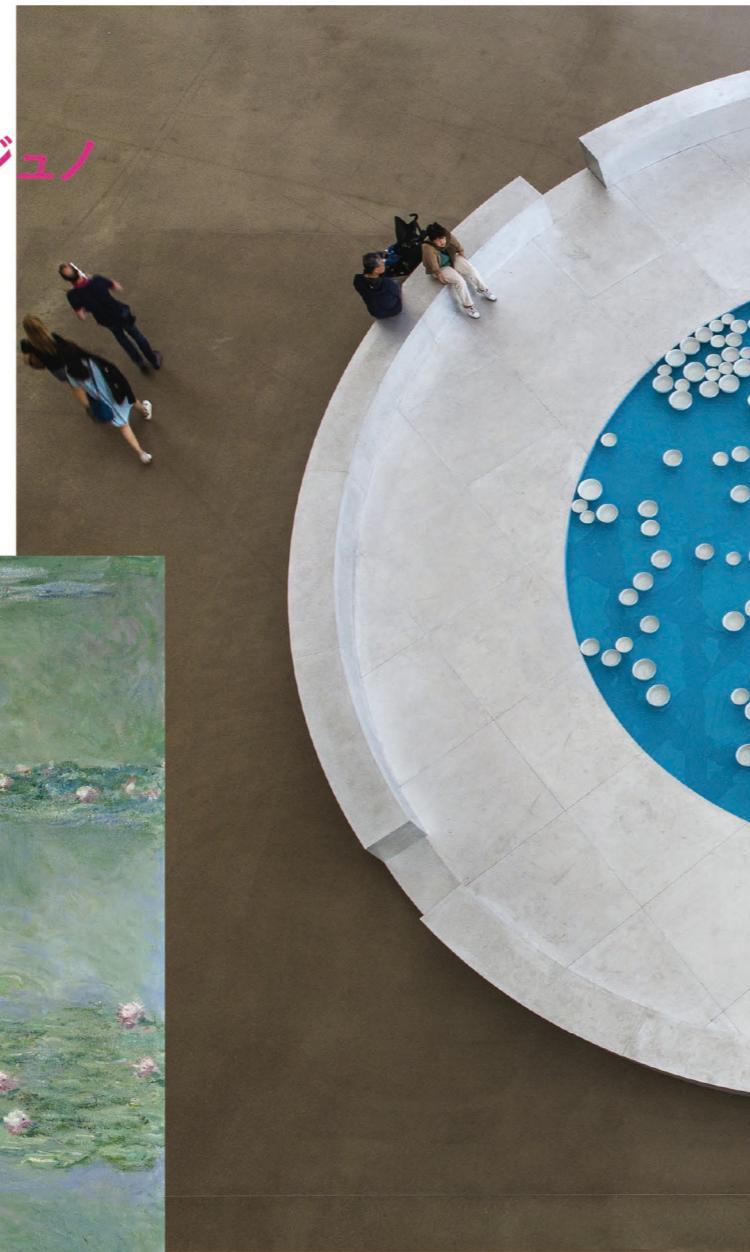
共鳴 共振する現代アートと巨匠たちのセッション。

モネ × セレスト・ブルシェ＝ムジュノ

美術館のなかに作られた円形プールの水面をゆったりと漂う白いボウルの数々。フランスの現代美術を代表するアーティストによるインсталレーション。大小の陶器がぶつかることで偶発的に奏でられる音色と、水の流れによって絶え間なく移り変わる光景は、モネが絵画に描きとどめた水面のきらめきに呼応するかのようです。



クロード・モネ《睡蓮》1907年
油彩/カンヴァス 93.3 x 89.2 cm ポーラ美術館蔵



セレスト・ブルシェ＝ムジュノ
『クリナメン v.2』2013年
ポリ塩化ビニール製シート、ポンプ、
加熱装置、陶磁器
Installation view: Centre Pompidou-Metz
© Céleste Boursier-Mougenot
Photo: Rémi Bertrand



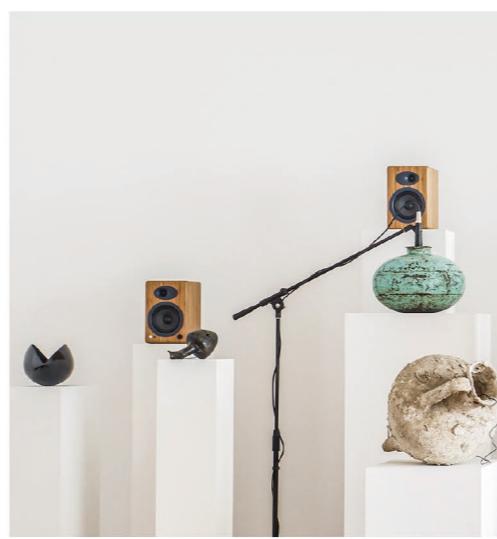
《加彩雲氣文壺》
前漢時代
前3-1世紀
ポーラ美術館蔵



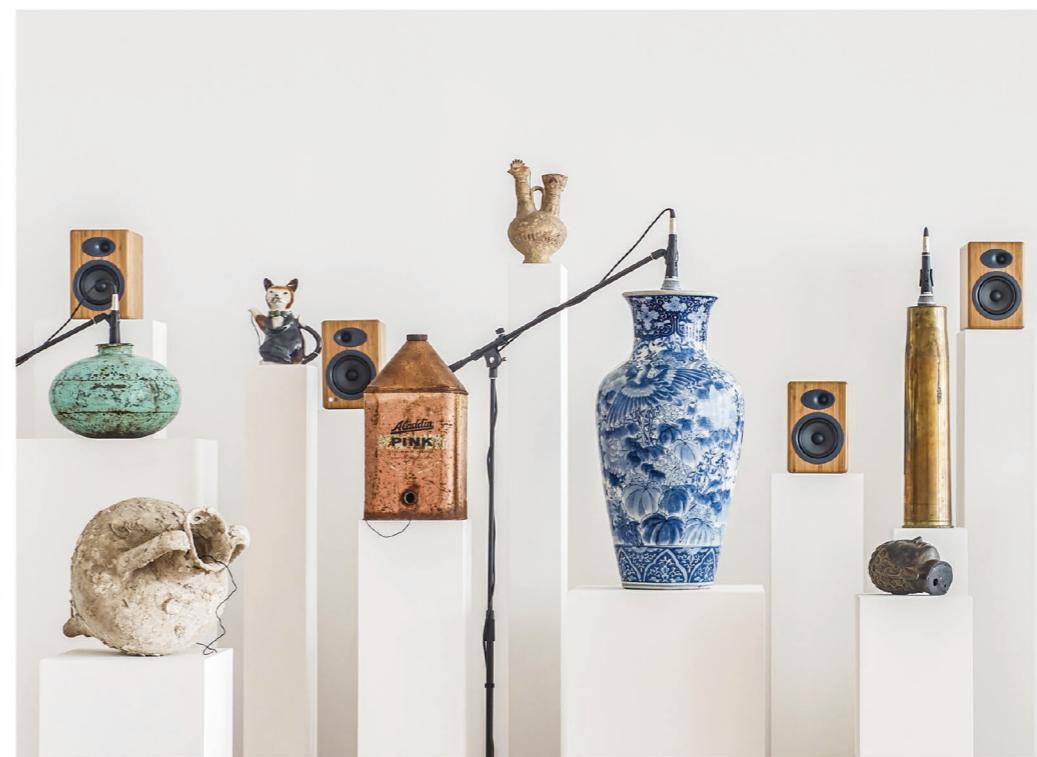
《五彩花鳥文瓶》
(康熙五彩)
景德鎮窯 清時代
17-18世紀
ポーラ美術館蔵



《火焰紅雙耳方壺》
(大清乾隆年製)銘
景德鎮窯 清時代
18世紀
ポーラ美術館蔵



オリヴァー・ビア《悪魔たち》(部分) 2017年
16個の器、音響機器 サイズ可変
フォーリンデン美術館蔵(ワッセナー、オランダ)
Image courtesy of the artist and Galerie Thaddaeus Ropac
© Oliver Beer Photo: Stephen White



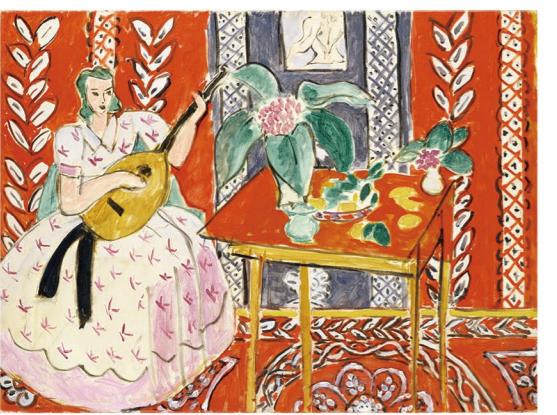
東洋陶磁 × オリヴァー・ビア

エトルリアの陶器、コンゴの仮面、砲弾からティーポットまで、さまざまな「器」の内奥にかすかに響く「声」をマイクでとらえ、音楽を紡ぎだすインсталレーション。時代や国境を越えた異質なものが、共存しながら美しいオーケストラを編成しています。ポーラ美術館の東洋陶磁との間には、どのようなセッションが生まれるのでしょうか？



パブロ・ピカソ《葡萄の帽子の女》1913年
油彩/カンヴァス 55.0 x 46.1 cm ポーラ美術館蔵
© 2019 - Succession Pablo Picasso - BCF(JAPAN)

渡辺豊《ピカソと女たち》(仮) 2019年 油彩、木炭、鉛筆/カンヴァス 162.0 x 130.3 cm Courtesy of the artist and Maki Fine Arts



アンリ・マティス《リュート》1943年
油彩/カンヴァス 60.0 x 81.5 cm ポーラ美術館蔵

モネ、セザンヌ、ピカソ—。巨匠たちと出会う 現代アート

本展覧会は、ポーラ美術館の絵画、彫刻、東洋陶磁など多岐にわたるコレクションを、現代美術の第一線で活躍する作家たちの作品とともにご紹介するものです。2002年の開館以来、現代美術の作家たちに焦点をあてる本格的な企画展は、今回の展覧会が初となります。これまで、モネやピカソといったコレクションの中核をなす作家をはじめ、巨匠たちの作品とともに歩んできたポーラ美術館は、同時代の表現へと展望を拓げ、新たな一步を踏み出します。

展覧会タイトルである「シンコペーション」(切分法)とは、音楽において、リズムを意図的にずらし、楽曲に表情や緊張感をあたえる手法です。空間全体に広がるインスタレーション、音、映像、野外展示、写真、絵画など、現代の作家たちによる多様な表現は、時代や国境を越えて過去の巨匠たちの作品に今日的な光を当て、現代を生きる私たちの感覚を揺さぶる、さまざまなリズムをもたらします。

大自然の懷に抱かれたポーラ美術館は「自然と美術の共生」を謳い、本来は密接であった両者の繋がりを取り戻すことを目指してきました。美術における過去と現在の表現もまた、断絶するものではなく、絶えず新たな関係を紡いでゆくべきものでしょう。コレクションの数々が内包する時間とリズムが、現代の表現と出会い、箱根の豊かな自然のなかで新たな響きをうみだします。

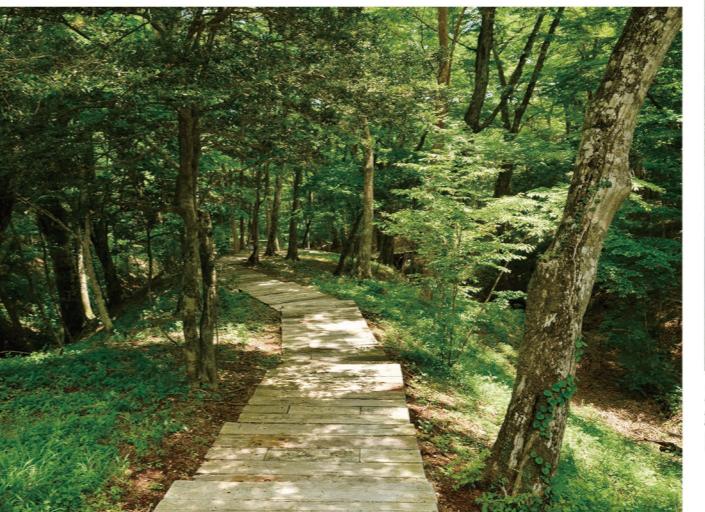
ダリ × アリシア・クワデ



ダリの偏執狂的な細密描写による、「二重影像」が封じ込められた魔術的な絵画の世界。アリシア・クワデの鏡とガラス、ランプを組み合わせた神秘的なインスタレーションは、実像と鏡像が交錯する時間と空間の迷宮へと、見る者を誘い込みます。

サルバドール・ダリ《姿の見えない眠る人、馬、獅子》1930年
油彩/カンヴァス 60.6 x 70.4 cm ポーラ美術館蔵
© Salvador Dalí, Fundació Gala-Salvador Dalí, JASPAR Tokyo, 2019
B0414

アリシア・クワデ《まなざしの間に》2018年
真鍮、ガラス、鏡、ランプ サイズ可変
Photo: Roman März

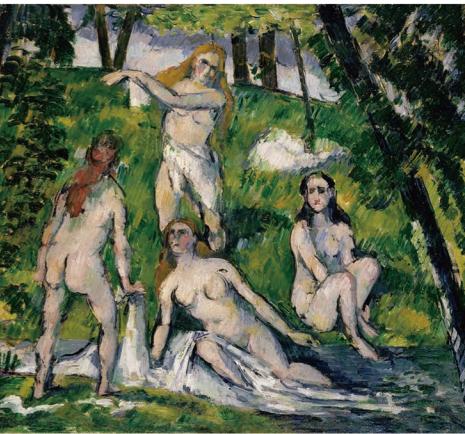


ポーラ美術館 森の遊歩道

ロダン、セザンヌ × プリンツ・ゴラム



オーギュスト・ロダン《カレーの市民(第二試作)》1885年、
鋳造年1977年 ブロンズ 高さ: 72.0 cm ポーラ美術館蔵



ポール・セザンヌ《4人の水浴の女たち》1877-1878年
油彩/カンヴァス 38.0 x 46.2 cm ポーラ美術館蔵



プリンツ・ゴラム《類似》2018年
ブンタ・デラ・ドガーナでのパフォーマンス
© Palazzo Grassi Photo: Matteo De Fina



スーザン・フィリップス《ロング・ゴーン》2006年
2チャンネル・サウンド・インスタレーション
Installation view: Aspen Art Museum, 2008 Photo: Susan Philipsz

出展作家

※ 姓のアルファベット順



オリヴァー・ビア Oliver Beer

1985年イギリス、ケント生まれ。大学で音楽、美術、映画理論を学ぶ。建築の内部空間を巨大な楽器として扱い、人間の声を使ってハーモニーを奏でるプロジェクトをはじめ、音や聴覚に関わるインスタレーション、彫刻、映像やパフォーマンスなど、その表現は多岐にわたる。2019年7月より、メトロポリタン美術館分館(ニューヨーク)にて個展を開催。

オリヴァー・ビア《家庭の神々(祖母)》2019年 16個の器、音響機器 サイズ可変
Courtesy of the artist and Galerie Thaddaeus Ropac Photo: Christopher Duprat



アブデルカデル・バンシャンマ Abdelkader Benchamma

1975年フランス、マザメに生まれる。繊細かつダイナミックなドローイングで、崩壊と生成の絶えざる運動を描き出す。文学や秘教、哲学、天体物理学、神経生理学など、多様な分野を参照しながら即興的な身振りで生み出される、混沌としたモノクロの世界は圧巻。2018~19年、ヴィラ・メディチ(ローマ)のレジデンス・プログラム参加。

アブデルカデル・バンシャンマ《宇宙創生の響き》2018年 アクリル/コーティング・シート
Installation view: Collège des Bernardins, Paris Photo: Jean-Mathieu Gautier



カンディダ・ヘーファー Candida Höfer

1944年ドイツ、エーベルスヴァルデに生まれる。正面性と対称を強調した構図で知られる写真家ベッヒャー夫妻に師事。時間が静止したかのような、空間のディテールを精緻に捉える手法で、図書館、美術館、動物園、オペラハウスなど、文化的象徴となる公共空間を数多く撮影する。

カンディダ・ヘーファー《ロダン美術館、パリ II》2000年 Cプリント 85.0 x 85.0 cm 国立国際美術館蔵
Courtesy: Ben Brown Fine Arts © VG BILD-KUNST, Bonn & JASPAR, Tokyo, 2019
B0414



石塚 元太良 Gentaro Ishizuka

1977年東京都生まれ。写真家。大型のフィルムカメラを用いながら、氷河、パイプライン、ゴールドラッシュなどをモティーフに、アラスカやアイスランド、ナミビア、パタゴニアといった極地方で主にランズケープを撮影。作品は、「誰も見たことのないもの」への旺盛な欲求と、独自の詩情を湛える。2016年Steidl Book Award Japanグランプリ受賞、『GOLD RUSH ALASKA』を出版予定。

石塚元太良《Glacier Bay Muir Inlet_001》2010年 Cプリント



磯谷 博史 Hirohumi Isoya

1978年東京都生まれ。東京藝術大学で建築を、同大学院とロンドン大学ゴールドスミスカレッジで美術を学ぶ。彫刻、写真、ドローイング、またそれらを含んだインスタレーションは、極めて静謐、詩的でありながら、建築的なスケール感と精度をもって、認識の一貫性や統合的な時間感覚を揺さぶる。主な作品収蔵先に、ポンピドゥ・センター(パリ)、サンフランシスコ近代美術館他。

磯谷博史《カップル》2004-2011年 Cプリント 35.3 x 27.2 x 3.0 cm
Courtesy of the artist and Aoyama Meguro



アリシア・クワデ Alicja Kwade

1979年ポーランド、カトヴィツェに生まれる。ファウンド・オブジェクトをはじめ、ガラス、鏡、木材、石材、金属といったシンプルな素材を用いて、宇宙や時間、科学や哲学を主題とした彫刻作品などを制作。素材の美しさを活かした精巧なインスタレーションは、視界と境界を混乱させながら、見る者の知覚を拡張する。ベルリン在住。

アリシア・クワデ《まなざしの間に》(部分) 2018年 真鍮、ガラス、鏡、ランプ サイズ可変
Photo: Roman März



セレスト・ブルシェ=ムジュノ Céleste Boursier-Mougenot

1961年フランス、ニース生まれ。音楽家として活動を始め、演劇の舞台で日常的なノイズを取り入れた音楽を制作。作家活動の初期から一貫して偶発性や複雑性に关心を寄せ、楽器や身近なオブジェ、機械、鳥や蜂といった生物を用いたインスタレーションにより、音と視覚の共鳴に関する表現を展開している。第56回ヴェネチア・ビエンナーレ、フランス館代表。

セレスト・ブルシェ=ムジュノ《クリナメン v.1》2013年 ポリ塩化ビニル製シート、ポンプ、加熱装置、陶磁器
Installation view: National Gallery of Victoria, Melbourne © Céleste Boursier-Mougenot Photo: NGV Photographic Services Department



スザン・フィリップス Susan Philipsz

1965年イギリス、グラスゴー生まれ。楽器や環境音、自身の歌声などを用いて、空間と物語、音に関する作品を制作。土地の記憶や歴史といった複雑なコンテキストを、独自の視点で構築的なサウンド・インスタレーションへと転換した作品は、その空間を息づかせ、鑑賞者の感情や記憶を豊かに喚起する。2010年ターナー賞受賞。ベルリン在住。

スザン・フィリップス《弦楽器のための習作》2012年 24チャンネル・サウンド・インスタレーション
Installation view: dOCUMENTA (13), Kassel Hauptbahnhof, 2012 Photo: Eoghan McTigue



プリンツ・ゴラム Prinz Gholam

ヴォルフガング・プリンツは1965年ドイツ、ロイトキルヒ生まれ、ミヒヤエル・ゴラムは1963年レバノン、ベイルート生まれ。アーティスト・デュオとして、パフォーマンスやヴィデオ作品のほか、身体と場所、歴史にまつわるテーマで、オブジェ、写真、ドローイング、テキスト等を組み合わせたインスタレーションを制作する。ベルリン在住。

プリンツ・ゴラム《火災、あるいは夜の革命》2012年 シュプレンゲル美術館「抽象の部屋」でのパフォーマンス
© Prinz Gholam



ヴォルフガング・ティルマンス Wolfgang Tillmans

1968年ドイツ、レムシャイトに生まれる。1980年代からファッショントマガジン『i-D』などで写真を発表し頭角を現す。プリントを直接壁に留めた自由なレイアウトで、世界の複雑さや同時性を提示するインスタレーションで知られる。日本国内の美術館では、2004年と2015年に個展を開催。現代の写真表現の可能性を更新し続けるアーティスト。ベルリン在住。

ヴォルフガング・ティルマンス《Weed》2014年 インクジェット・プリント 40.6 x 30.5 cm 個人蔵
Courtesy: Wako Works of Art © Wolfgang Tillmans



渡辺 豊 Yutaka Watanabe

1981年東京都生まれ。溶け合うような空想的イメージと有機的なフォルムをつなぎ合わせた画面を特徴とし、抽象と具象の間を行き来する絵画を制作。近年のシリーズでは、人物の名前をインターネット上で検索し、探し出されたイメージの要素を組み合わせながら、多面的・重層的な肖像画を描いている。

渡辺豊《Brooks》2018年 油彩/キャンバス 162.0 x 130.0 cm Courtesy of the artist and Maki Fine Arts



横溝 静 Shizuka Yokomizo

1966年東京都生まれ。哲学を専攻したのち1989年に渡英、美術を学ぶ。写真や映像を中心制作を続けている。「見る」という行為を作品の構造に取り入れた写真作品や、時間と身体についての映像作品等を発表。近年は、イメージと人間との関係について考察している。ロンドン在住。

横溝静《Forever (and again)》2003年 DVDプロジェクト、2面 17分
Courtesy: Wako Works of Art © Shizuka Yokomizo

ポーラ美術館コレクションより

ギュスターヴ・クールベ、エドゥアル・マネ、ピエール・オーギュスト・ルノワール、クロード・モネ、オーギュスト・ロダン、
ポール・セザンヌ、ピエール・ボナール、アンリ・マティス、パブロ・ピカソ、レオナルド・フジタ(藤田嗣治)、サルバドール・ダリ他。